

■ 社会安全学部・近藤誠司研究室が聴覚障害者の実態を捕捉 ■

コロナ禍における聴覚障害者の防災意識調査 ～ 滋賀県草津市におけるアンケートから ～

このたび関西大学社会安全学部の近藤誠司研究室は、聴覚障害者の実態を捕捉するため、滋賀県草津市において全数調査を行いました。その結果、あらためて「高齢の障害者」が多数を占め、災害時の支援者問題、社会的孤立の問題、コミュニケーション問題など、多くの課題を残していることが明らかになりました。

本件の
ポイント

- ・滋賀県草津市在住の聴覚障害者を対象とした防災意識調査
- ・災害時の支援者問題や避難所でのコミュニケーション問題など、多くの課題が浮き彫りに
- ・高齢の障害者を置き去りにしないためには、障害者同士の世代間交流を促す仕組みづくりが必要

本調査は、草津市に在住する聴覚障害者 328 人に対して、質問紙の郵送・返送方式で実施しました。〔調査期間：2020年9月1日～10月7日。設問：全24問、回収率：47.9%（回収数157）、回答者の7割以上が60代以上の高齢者〕※アンケート結果の概要については、別紙資料をご参照

■ 聴覚障害者のコミュニケーション方法は、「発声」が6割強、「手話」や「スマホ」は3割弱

普段のコミュニケーション方法として、「手話」や「スマホ・携帯」を選んだのはそれぞれ約3割弱で、最も多くの人を選択したのは「発声」でした。失聴者よりも難聴者が多いこともあり、「発声」が重要な手段となっていることが確かめられました。このことから、コロナ禍においてマスクやフェイスシールド等を着用したり、声のボリュームを抑制したりすることが、コミュニケーションの障壁となる可能性があることが推察されます。

■ 聴覚障害者の立場から、避難所に準備してほしいこと、市民に知っておいてほしいこと

避難所に求めるものとして、必要な物品には「聴覚障害者ワッペン」、「耳マークのバッジ」などの聴覚障害者であることを示すヘルプマークをはじめ、「支援者であることを示すビブス・ゼッケン」、「筆談ボード」、「手話通訳」、「字幕表示の設定をしたテレビ」などが挙げられました。また、表示文章の短文化や拡大文字を求める意見や、場内アナウンス・サイレン・デジタル音などの代替措置を考案してほしいといった意見もありました。さらに、背後から話しかけられてもわからないこと、マスクを付けている状態では聞き取りにくいことを知っておいてほしいといった声も複数ありました。

■ およそ4人に1人が「コロナ禍で嫌な思いをした経験がある」と回答

コロナ禍において、聴覚障害者であることによって困ったこと、嫌なことがあったか尋ねたところ、22.7%の人が「ある」と回答。「発声」や「口話」の場面で周囲からの理解や協力を得ることができずに苦境に陥っていた人が大勢いることが判明しました。具体的には、「マスクを付けての会話は聞き取りづらく口元も読みとれない」、「マスクを外してとは言えない」、「聞こえづらいので顔を近づけると嫌がられた」などがありました。また、仕事をする上で困難を抱えた人もいて、「リモートでのテレワークが困難」とする意見が複数寄せられました。そのほか、「生活全般に影響が及び、外出しなくなった」と記述した人もいました。

近藤准教授は「自分自身では困難を解消できない“社会的孤立”の問題について、今後、より深く調査・検討する必要がある。行政支援（公助）に限界や制限があるなかで、一つの活路を見出すとすれば、聴覚障害者同士の世代間交流を賦活する仕組みづくりが要請される。デジタルデバイスを使いこなせる若い聴覚障害者が避難所運営に志願して、高齢の聴覚障害者の悩みや不安を汲み取り、きめ細かく対応することができれば、健常者・障害者間のコミュニケーションギャップを苛烈にしてしまうリスクを低減することができるであろう」と指摘しています。

以上

この件に関するお問い合わせ

関西大学 総合企画室 広報課 担当：寺崎、木田

〒564-8680 大阪府吹田市山手町3-3-35 Tel.06-6368-0201 Fax.06-6368-1266

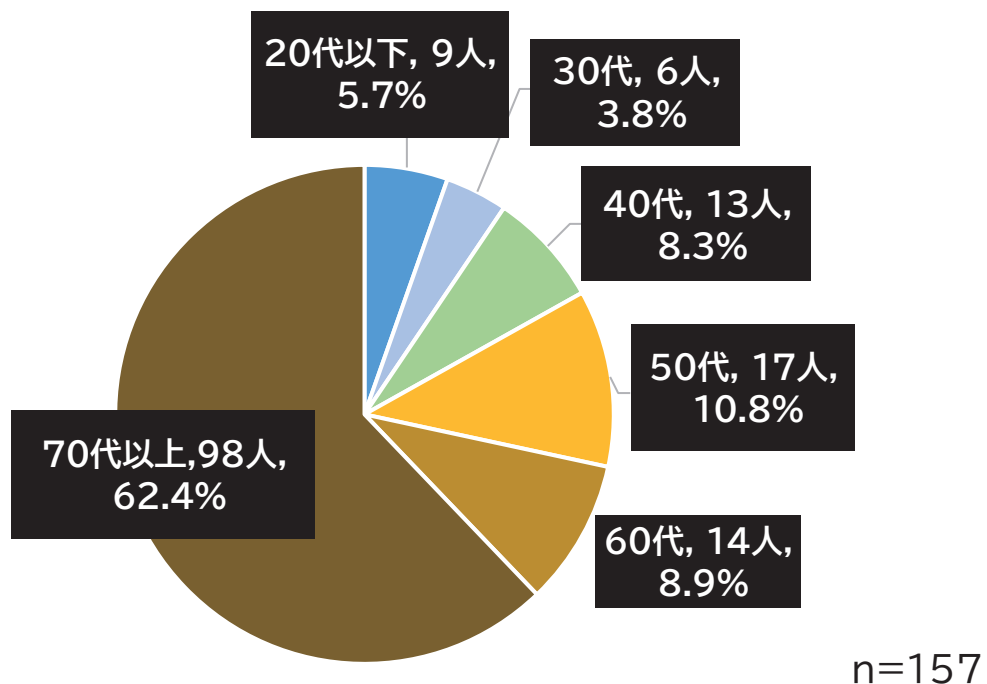
www.kansai-u.ac.jp

2020年度 草津市聴覚障害者全数調査

災害時のコミュニケーションのありかたを 考えるためのアンケート

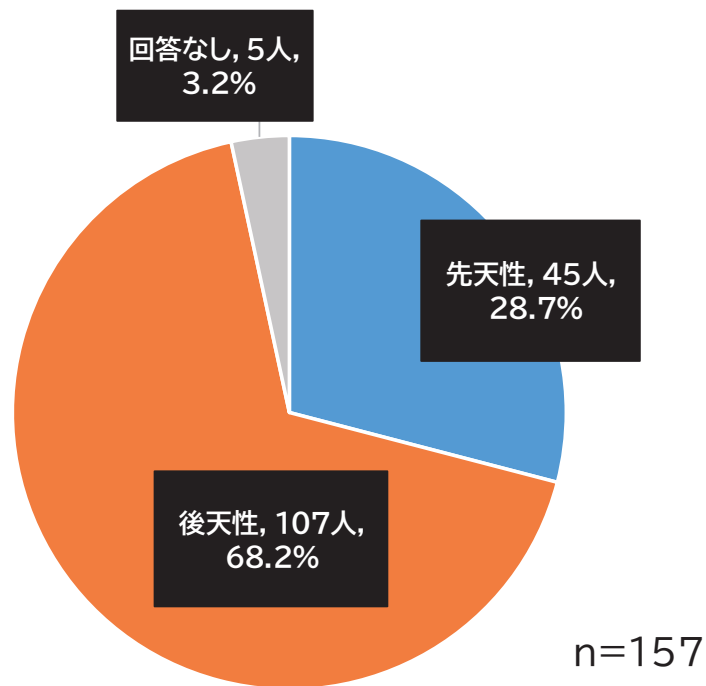
草津市障害福祉課
関西大学社会安全学部近藤誠司研究室
328名に配布 157名から回答
回収率 47.9%

回答者の年齢



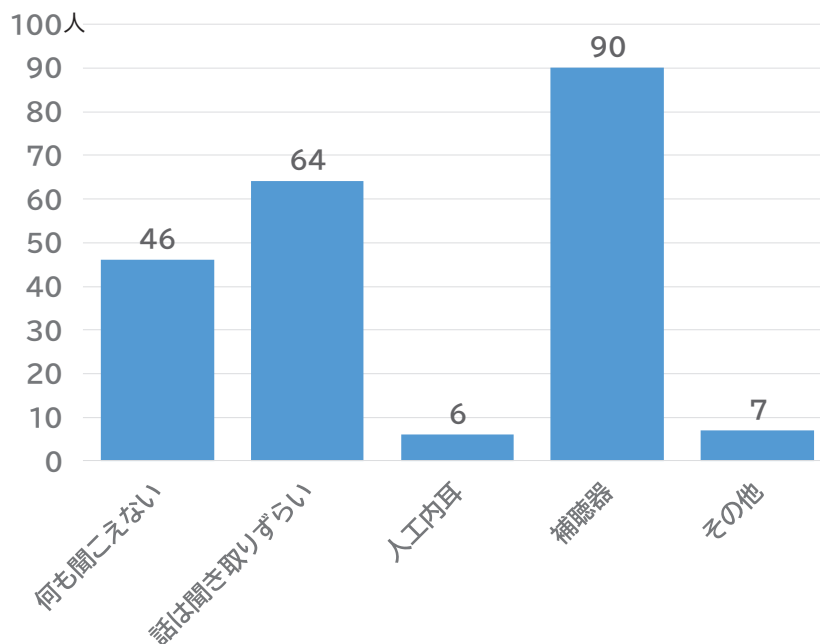
60代以上の高齢者の割合が7割を超える

聴覚障害について



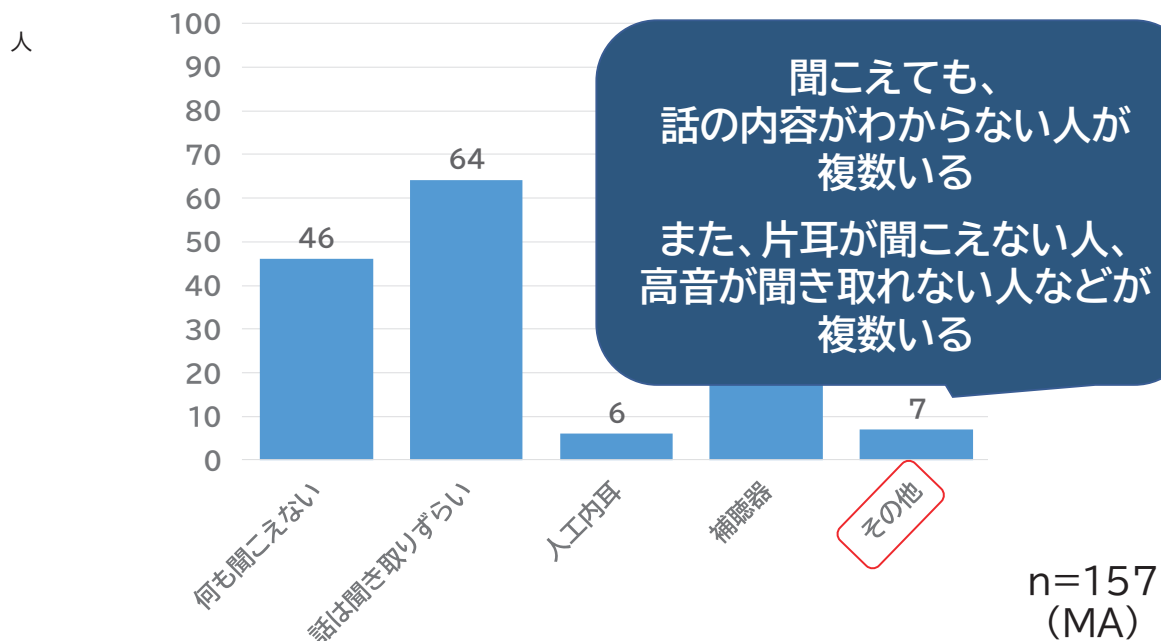
後天性の人が全体の7割近くを占める

障害の程度について



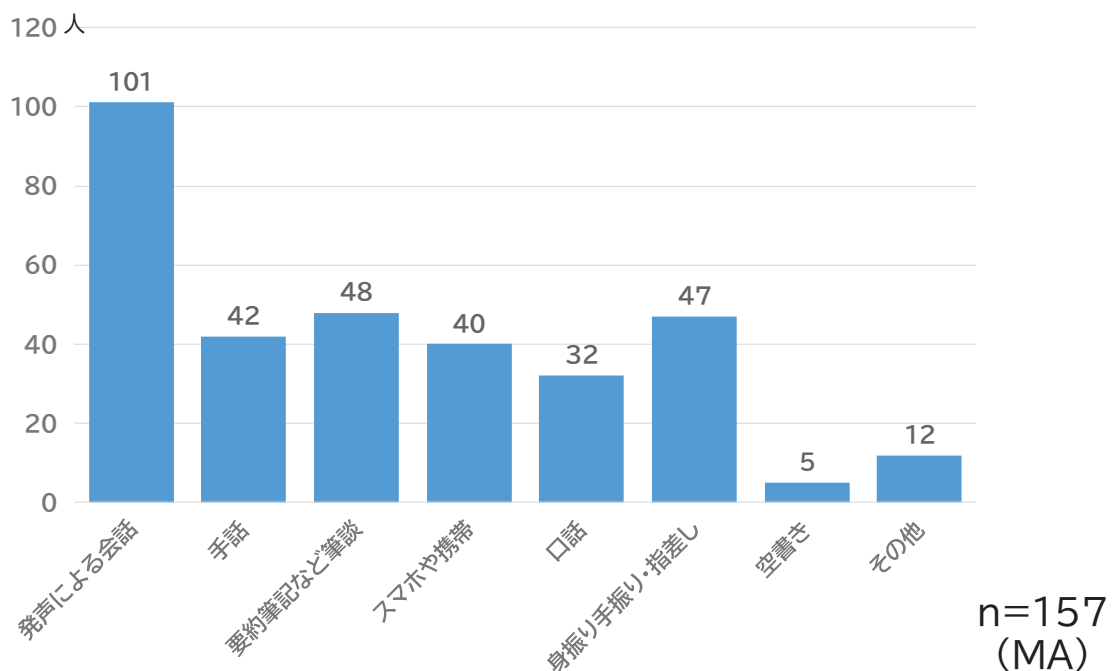
失聴者は46名(29.3%)
補聴器の使用者は90名(57.3%)

障害の程度について（「その他」の内容）



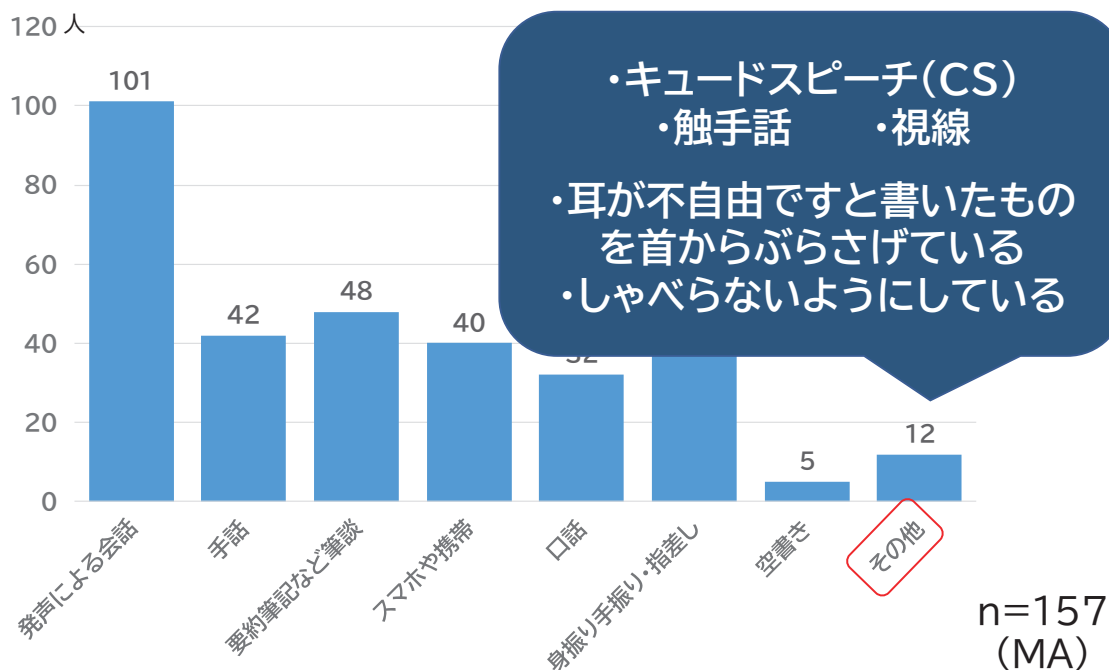
失聴者は46名(29.3%)
補聴器の使用者は90名(57.3%)

普段の「伝え方」



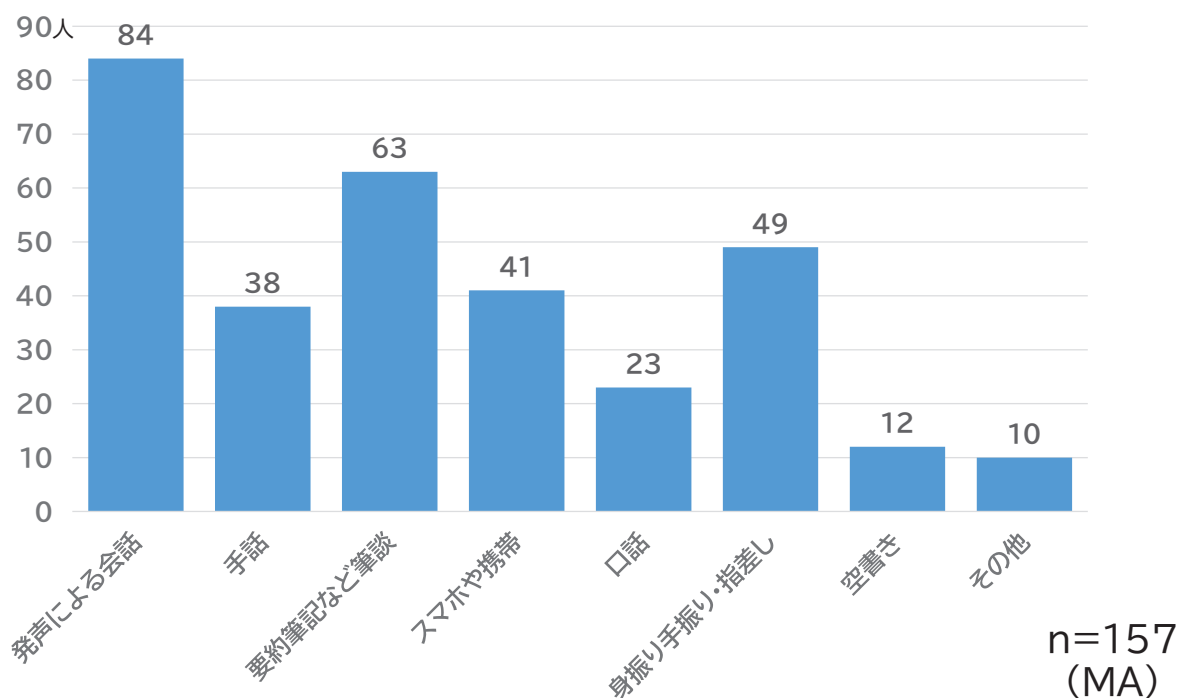
発声している人が101名(64.3%)

普段の「伝え方」(「その他」の内容)



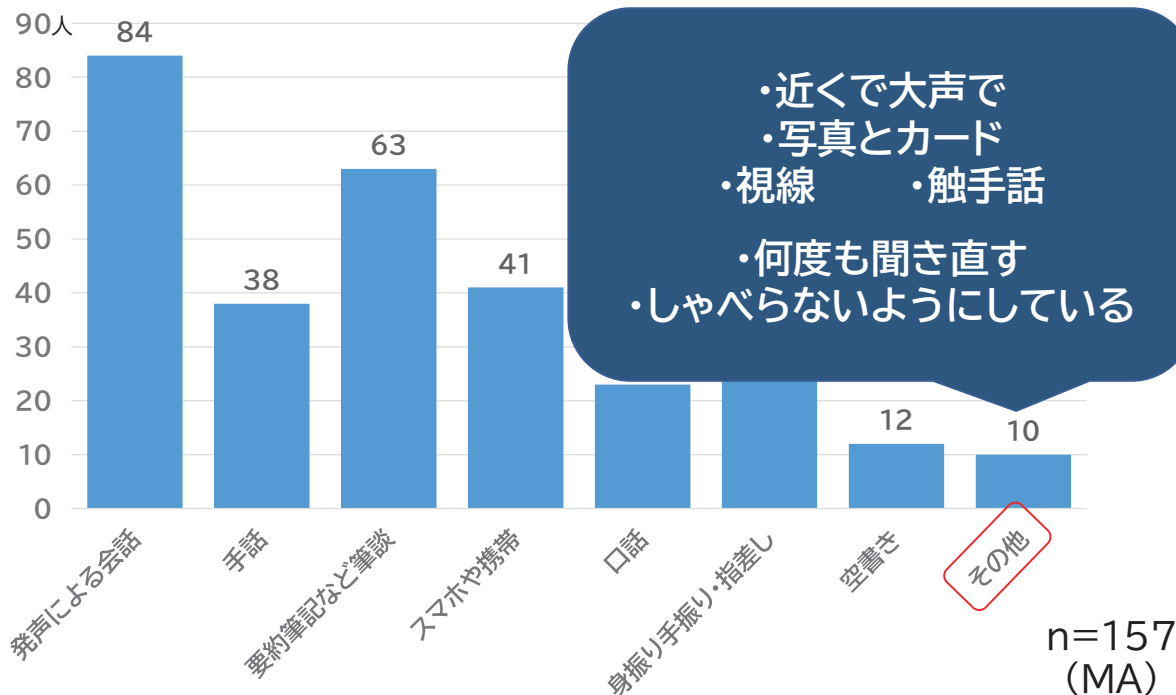
発声している人が101名(68.2%)

普段の「伝えられ方」



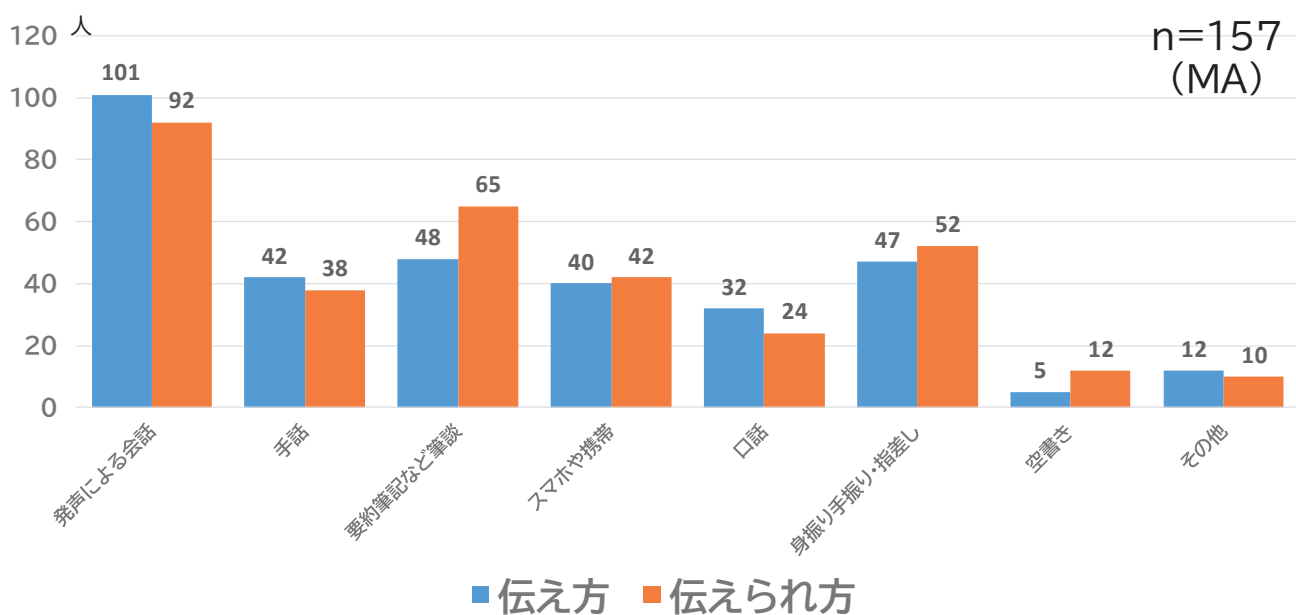
発声が84名(56.8%)、筆談が63名(42.6%)

普段の「伝え方」(「その他」の内容)



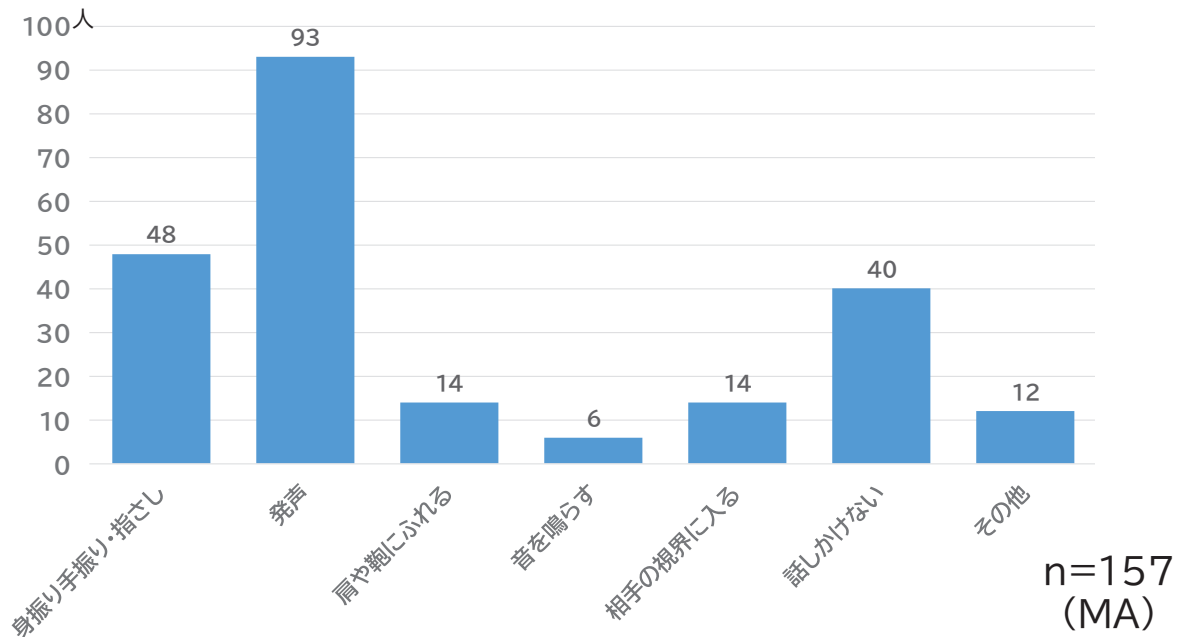
発声が84名(56.8%)、筆談が63名(42.6%)

普段の「伝え方」・「伝えられ方」



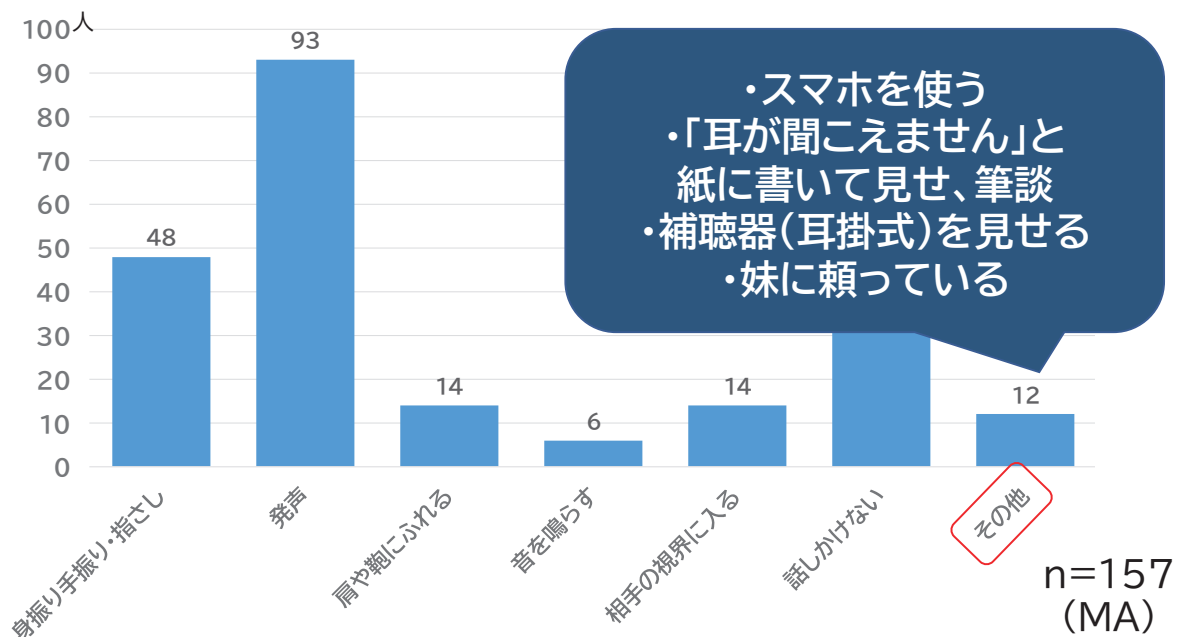
手話よりも、発声・筆談のほうが多い

道端で「知らない人」に伝えるには



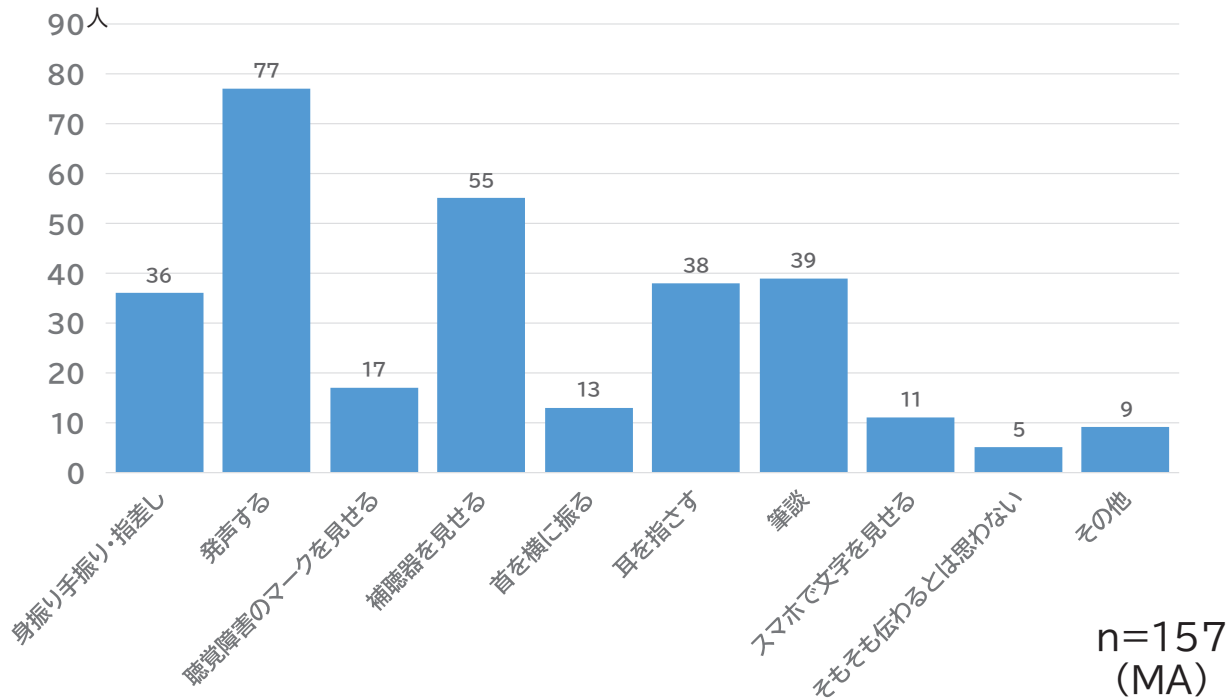
「発声」が、93名(62.8%)
コロナ禍での苦境が予想される

道端で「知らない人」に伝えるには（「その他」の内容）



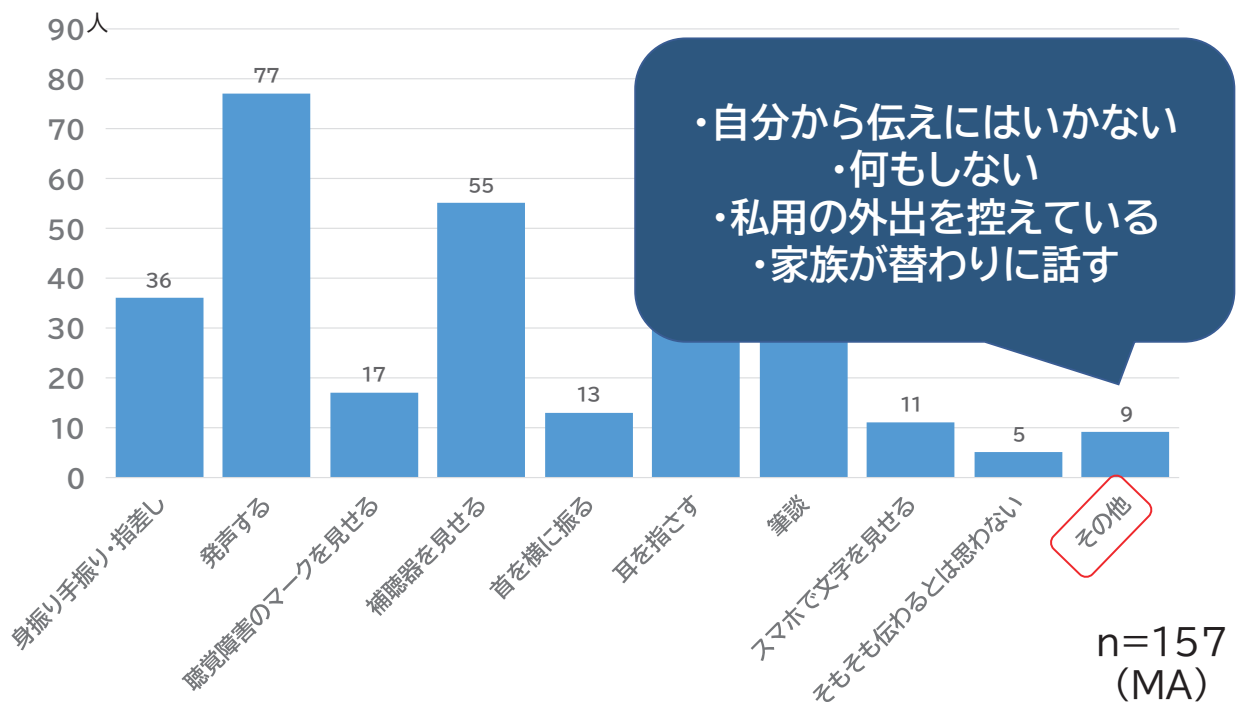
「発声」が、93名(62.8%)
コロナ禍での苦境が予想される

知らない人に自分が聴覚障害だと伝えるとき



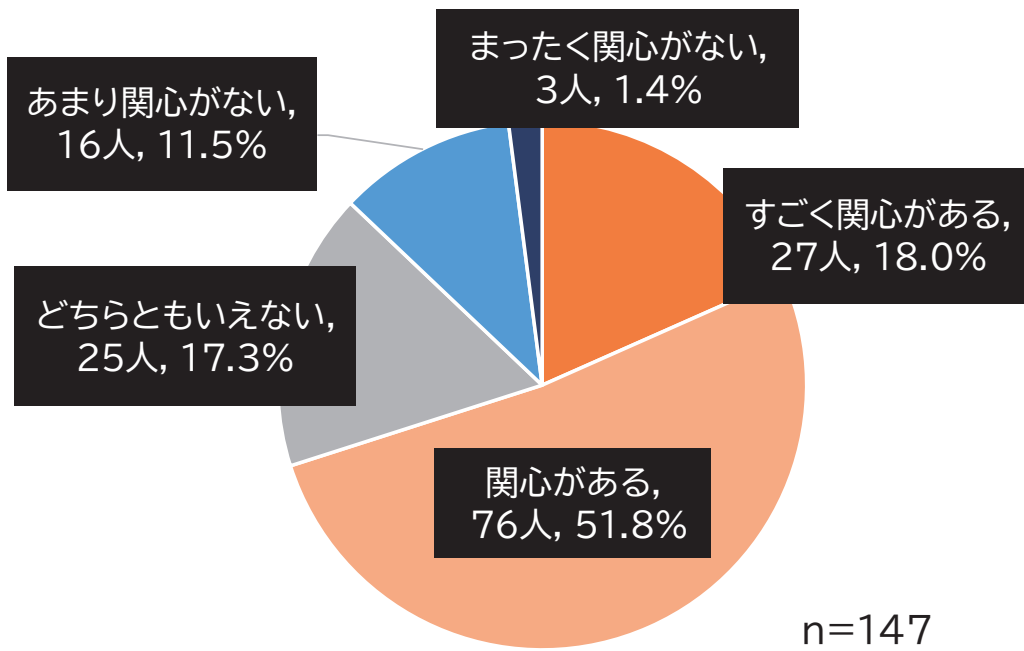
発声が77名(49.0%)、補聴器を見せるが55名(35.0%)

知らない人に自分が聴覚障害だと伝えるとき (「その他」の内容)



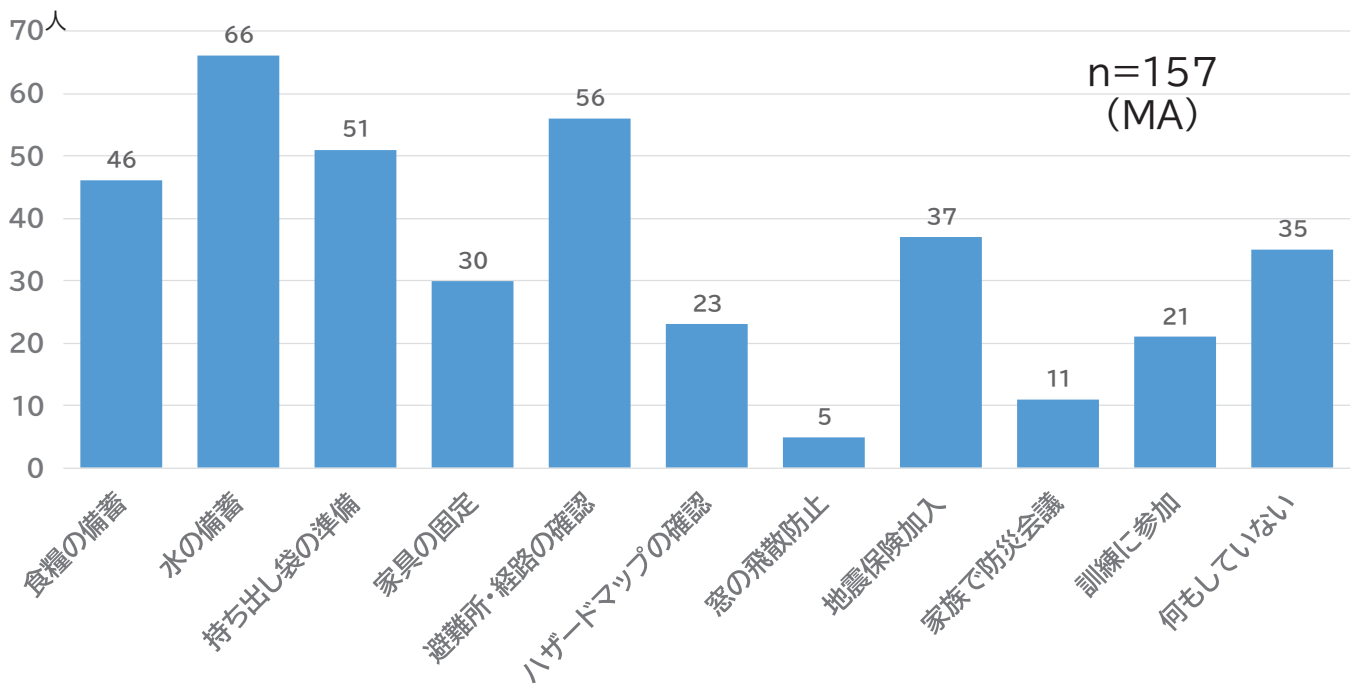
発声が77名(49.0%)、補聴器を見せるが55名(35.0%)

防災関心度について



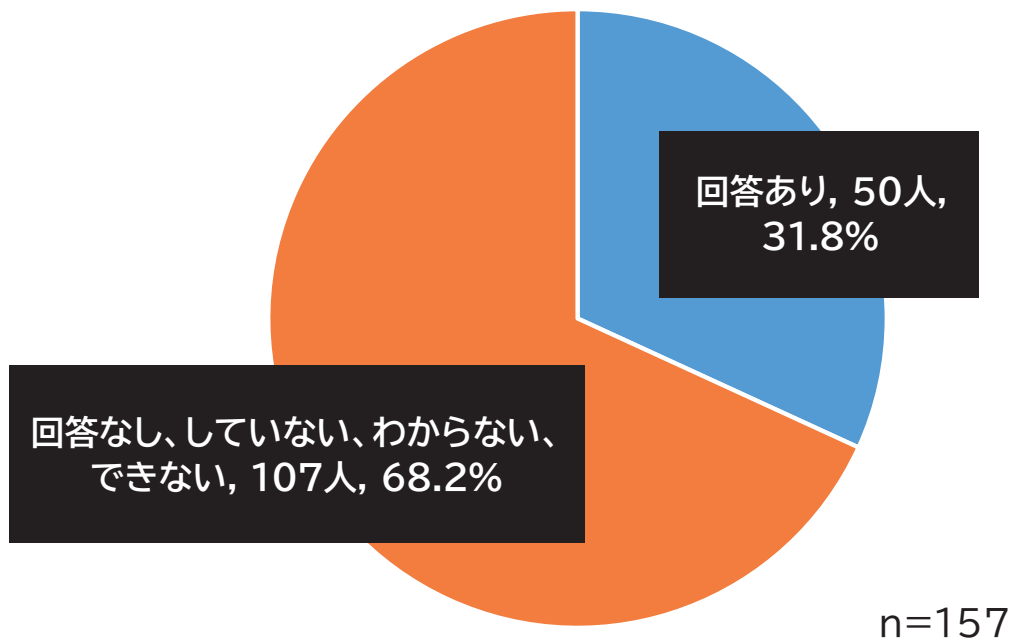
7割の人が防災に関心あり

備えの充実度(確実にしていること)



2割の人が「何もしていない」

聴覚障害者として特別に備えていること



約7割の人が「特別な備え」をしていない

聴覚障害者として特別に備えていること

自由記述

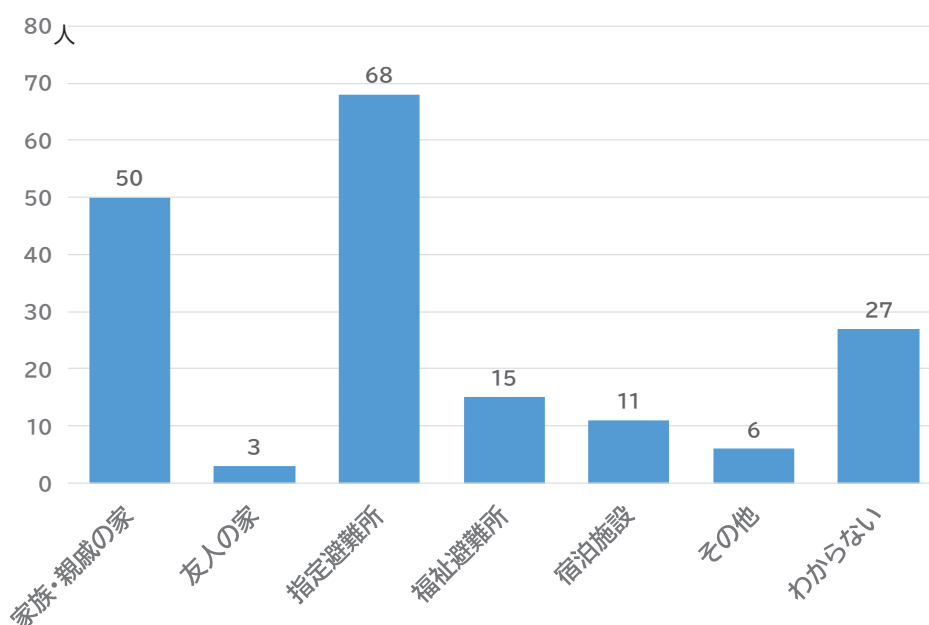
- 補聴器の予備電池を準備しておく
- 補聴器の予備を数台持っている
- 補聴器やスマホをすぐに手に取れる場所に置く
- 帽子の準備(補聴器を落とさないようにするため)
- バッグの中に人工内耳機器を入れて持ち歩いている
- ノートと鉛筆など筆談用具の準備、非常用持ち出し袋にも入れておく
- 大切なものは枕元において寝ている(障害者手帳・通帳・印鑑等)
- FAXとメールを使えるようにしておく
- スマホに防災情報のアプリをダウンロードしている
- 近所づきあい、聴覚障害者であることを知っておいてもらう
- 民生委員さん・町内会長さんに自分のことを伝えてある
- 要援護者リストに登録してある
- 避難経路の確認
- 他のかたの準備の中身を知りたい、ぜひ参考にしたい！

市民に知っておいてほしいことやアイデア

自由記述

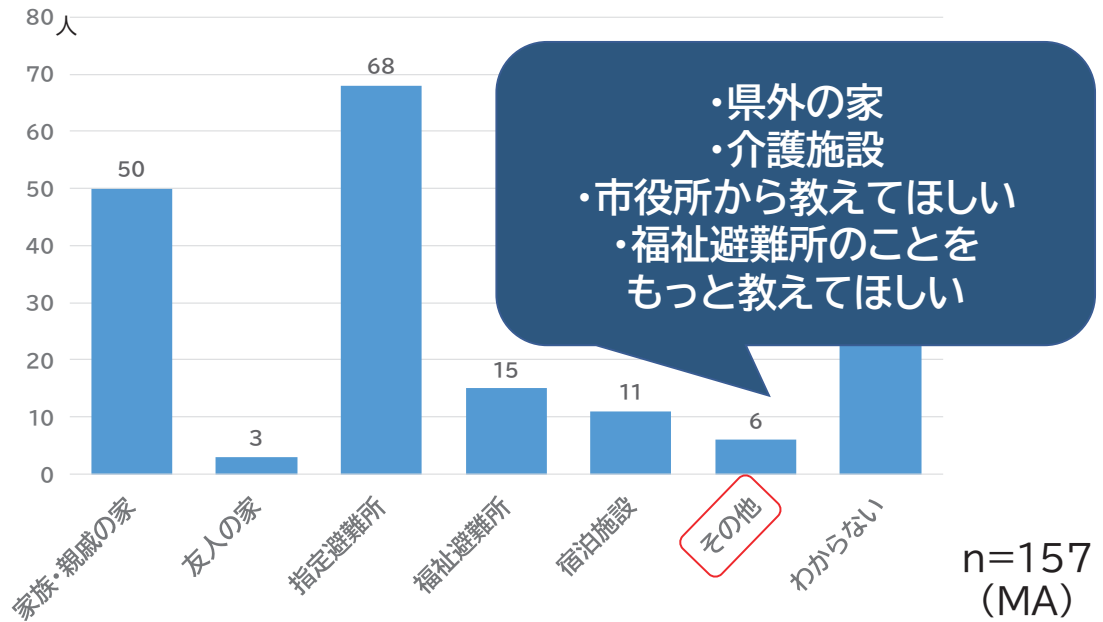
- 聴覚障害者ワッペン、耳マークのバッジ、スカーフなど
- 筆談ボード、掲示・表示の工夫、スマホ・FAXの活用、手話通訳も必要
- 避難所のテレビでは字幕表示をお願いします
- ポケットmimi(AI筆談機など)の活用、
- おたすけカードやメモ書きを使ってはどうか
- サポートできる人は、それがわかるように避難所でベストを着用
- 文章は短文でわかりやすく、大きな文字で表示を
- 簡単な会話は手話でおこないたい
- 場内アナウンス・サイレン・チャイム・デジタル音は聞こえない
- 後ろから話しかけられてもわからない
- マスクを付けている状態では聞き取りにくい
- 生活音で迷惑をおかけしてしまうかもしれません
- 普段から、聴覚障害について理解を深めてほしい
- 普通に接してくれたらそれでよい、特別扱いはしないでほしい
- やさしさと励ましがほしい
- 高齢者ゆえ、運に任せています、災害時のことまで頭がまわらない
- 自分のことは自分でするようにします、自分のことで精いっぱいです
- 相手が困っているならば、逆に助けてあげられるようにしたい

避難先の候補



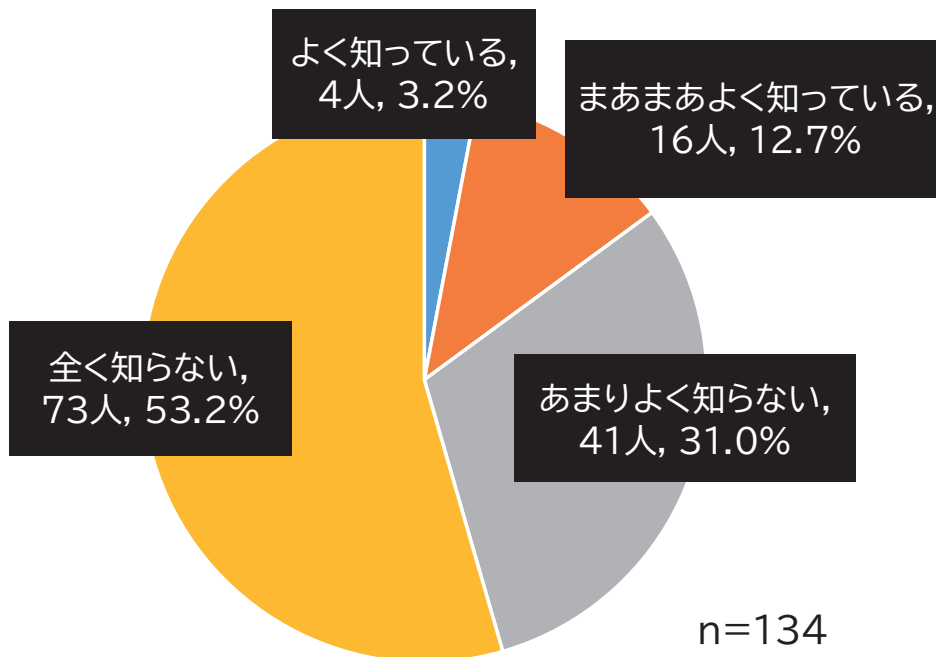
指定避難所=43.3% 福祉避難所=9.6%
17.2%の人が「わからない」

避難先の候補（「その他」の内容）



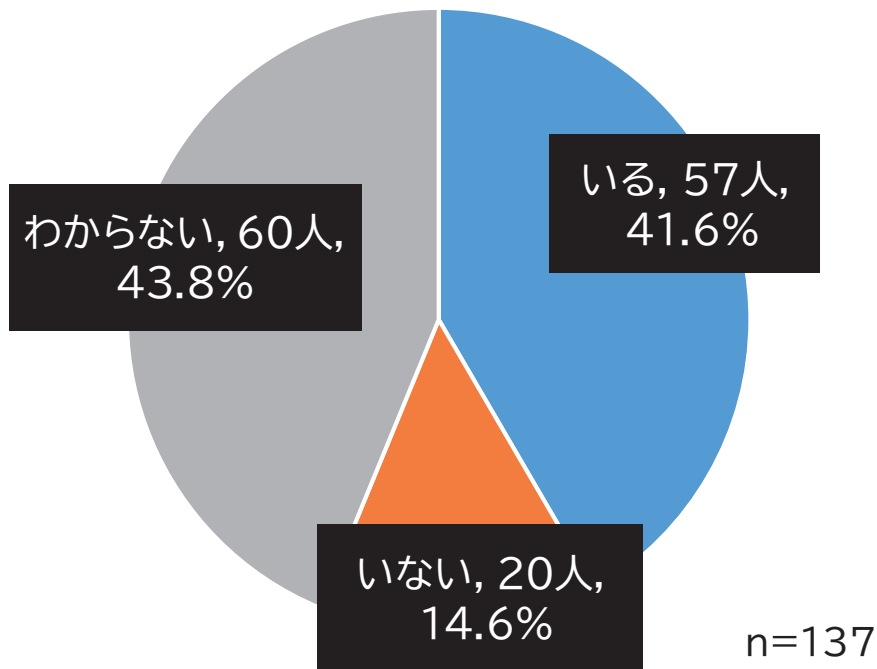
指定避難所=43.3% 福祉避難所=9.6%
17.2%の人が「わからない」

福祉避難所について



過半数が「全く知らない」

ライフライン途絶時の支援者



「(支援者が)いる」の回答は4割程度

ライフライン途絶時の支援者(具体例)

(別居の)
家族・親戚

近所の人

友人

ボランティア

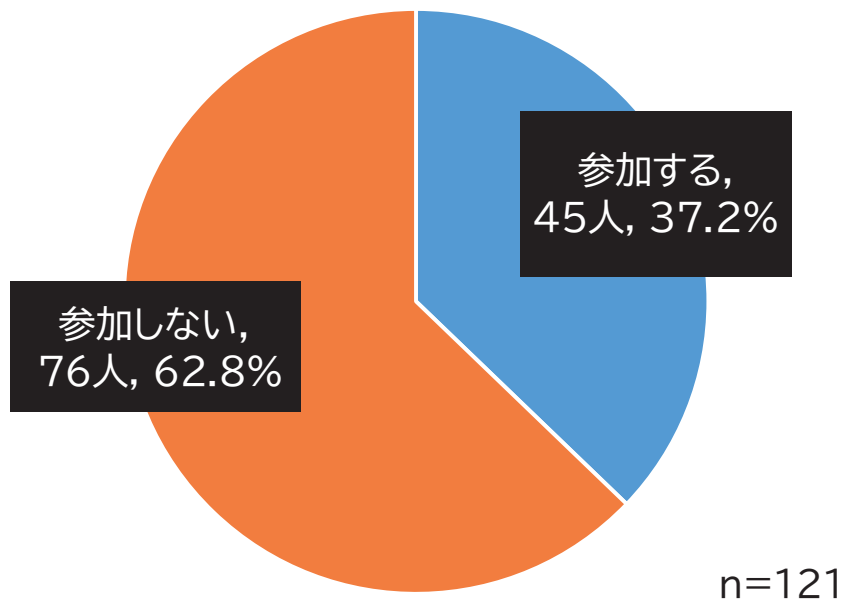
民生委員

ケアマネ

「頼らないように
しています」

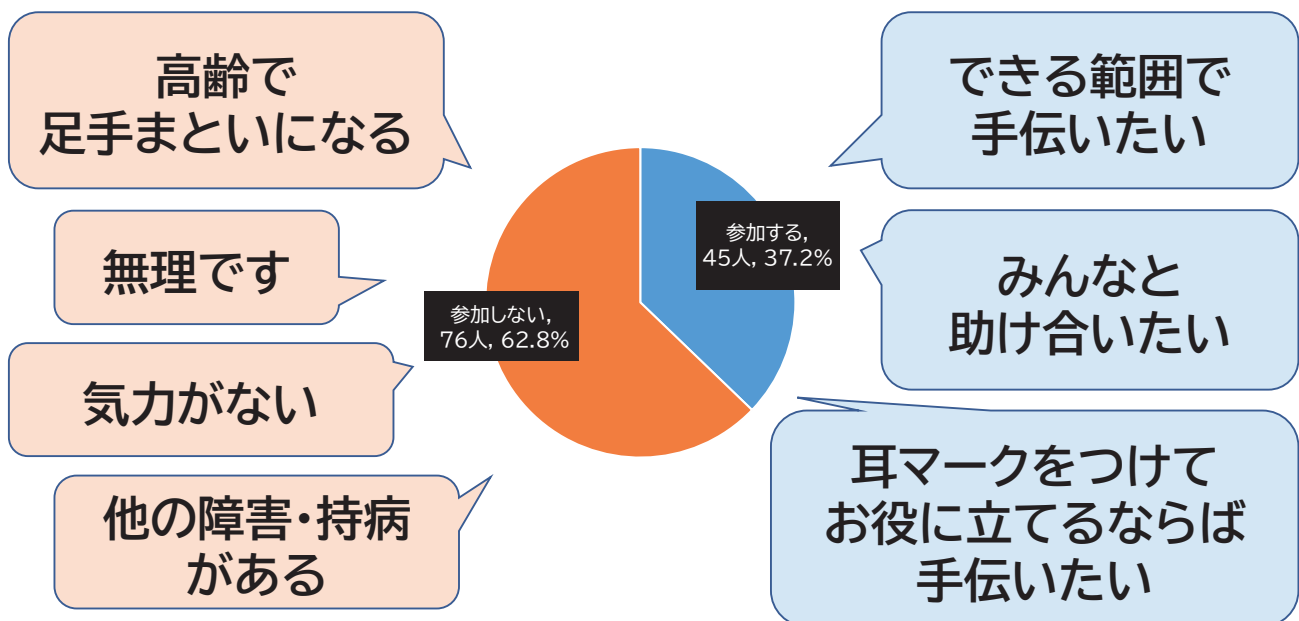
「まわりはみんな
使えない」

避難所運営に参加するか



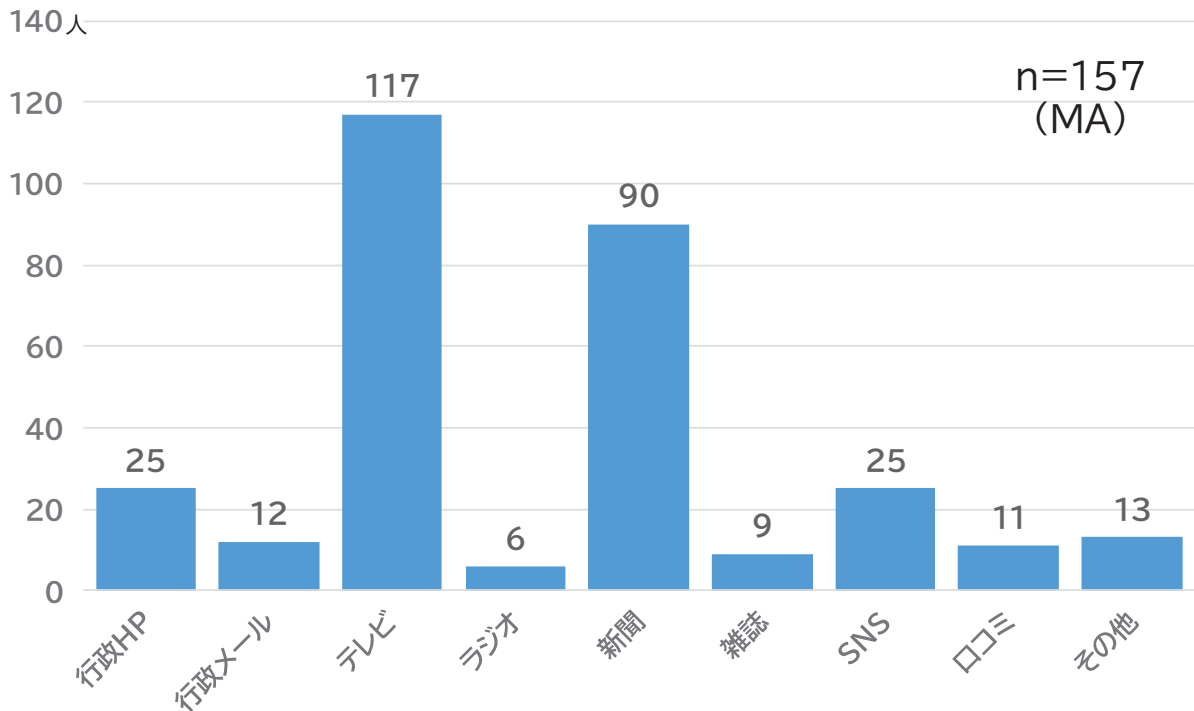
「参加する」の回答は4割程度
回答率が77.1%に留まる→ 悩ましい問いだったか

避難所運営に参加するか



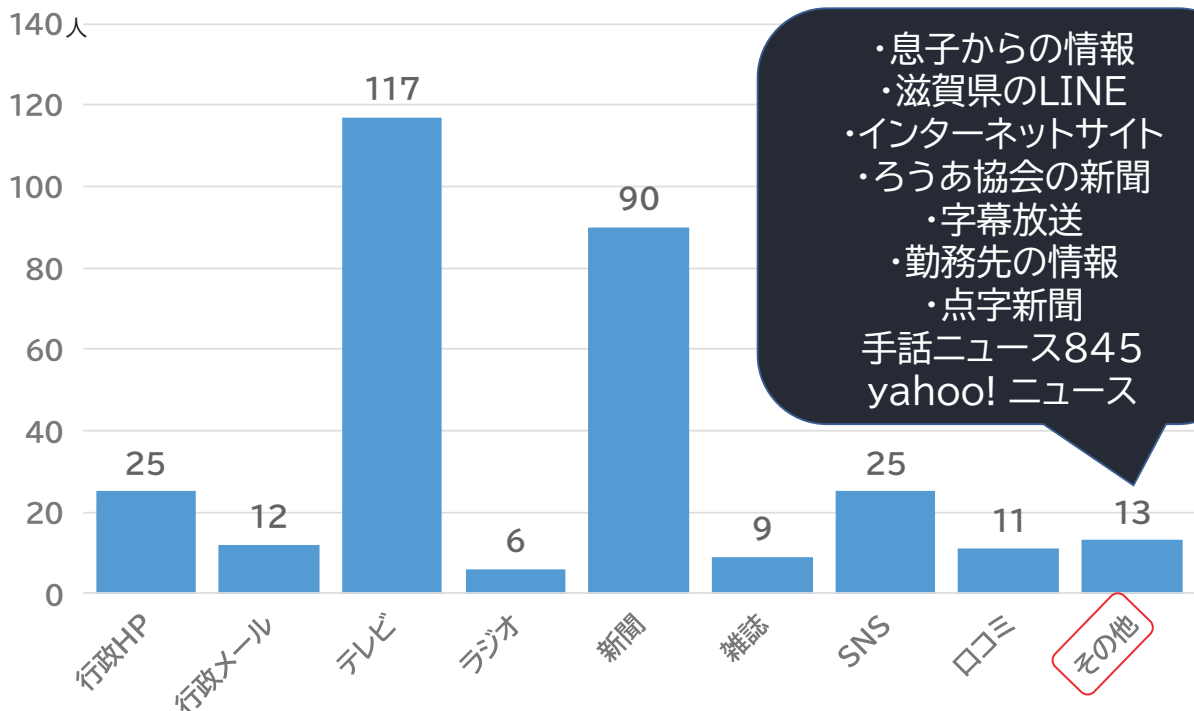
「参加する」の回答は4割程度
回答率が77.7%に留まる→ 悩ましい問いだったか

コロナ禍の情報源



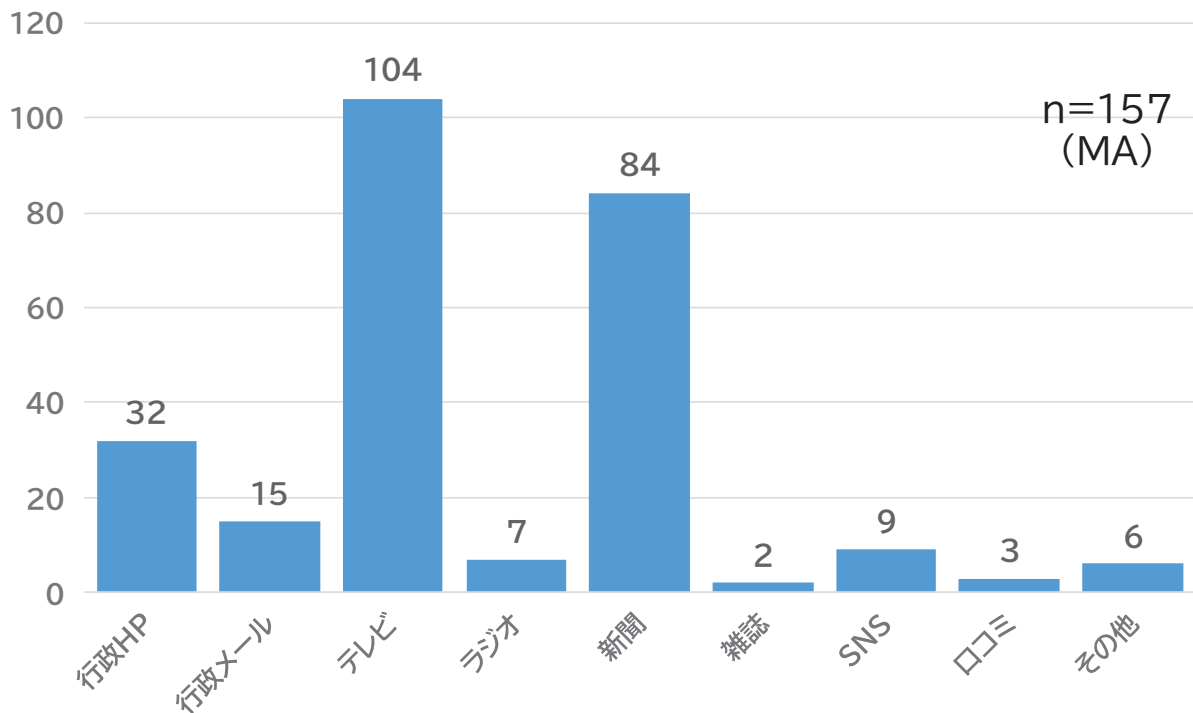
テレビと新聞の利用率が高い

コロナ禍の情報源（「その他」の内容）



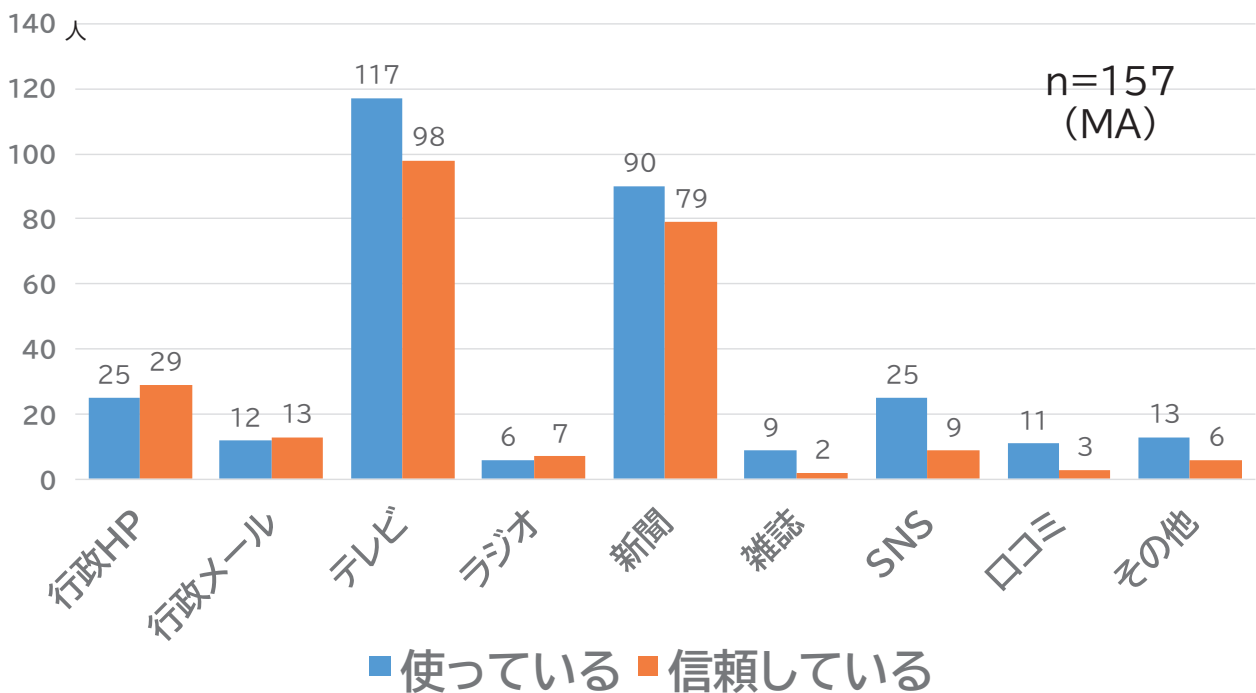
テレビと新聞の利用率が高い

コロナ禍において信頼している情報源



テレビと新聞の信頼度が高い

コロナ禍の情報源とその信頼度



SNSはギャップがある→使っていても信頼していない

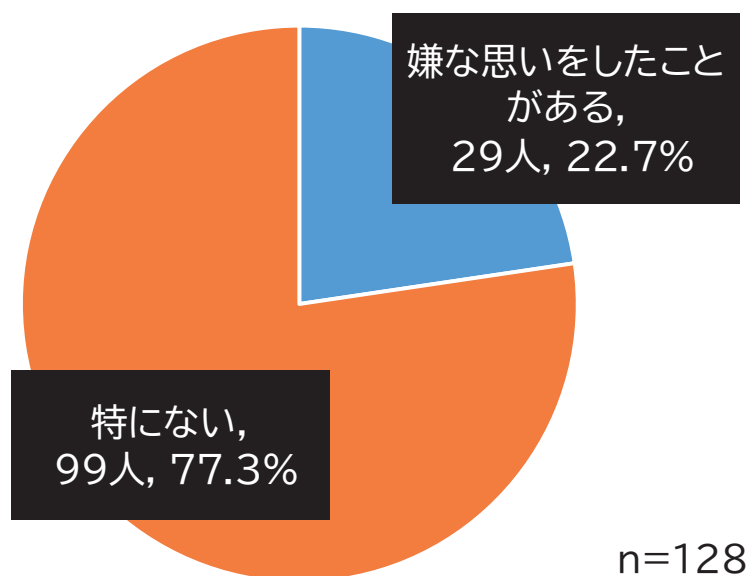
コロナ禍において役立った情報

自由記述

- 滋賀県のLINEによる県知事の会見ムービー
→ 手話通訳を介しての情報も得られるため
- 手話ニュース845による感染状況のニュース
- 行政のホームページを参考にしていました
- 生協に入っているため、買い物に関する情報は頼りになった
- 勤務先からの情報

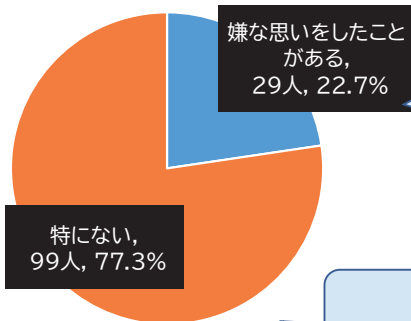
- インターネットができないので新聞とテレビだけが情報源
(70代以上、後天性)
- 聴覚障害者だけのLINEグループをつくってはどうか
(50代、先天性) → 健聴者とのコミュニケーションに問題あるから
- ZOOMに字幕を入れることができた
(30代、後天性)

コロナ禍で、聴覚障害があることによって 嫌な思いをしたことがあるか



およそ4人に1人は「ある」

コロナ禍で、聴覚障害があることによって嫌な思いをしたことがあるか



マスクを付けての会話は聞き取りずらく口元も読みとれない

マスクを外してとは言えない

口話ができない

外出しなくなった

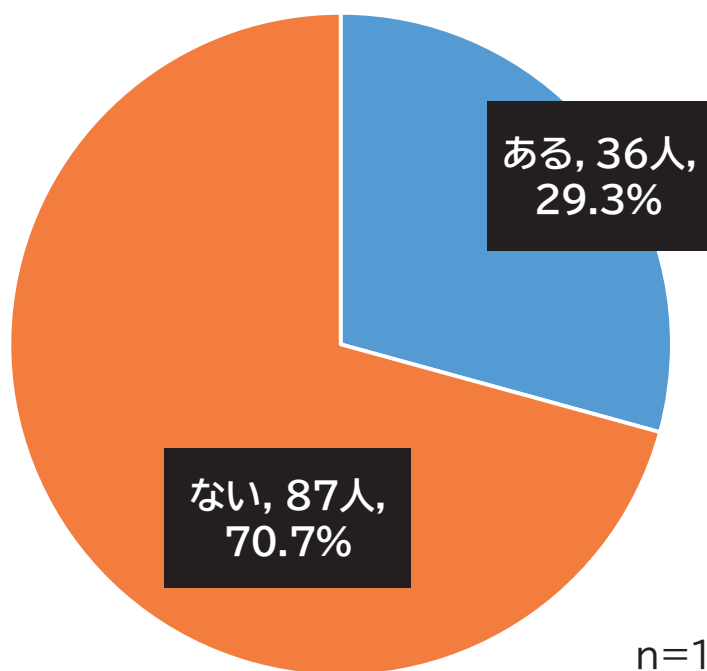
テレワークが困難

声が大きいと言われた

聞こえづらいので顔を近づけると嫌がられた

新しい言葉(コロナ、ロックダウン等)の意味がわからない、すぐに読み取れない

コロナ禍において改善したこと



およそ3人に1人は「ある」

コロナ禍において改善したこと

自由記述

- 規則正しい生活を送ること、ウォーキング
- 検温、除菌、消毒
- マスク、手洗い、うがい、こまめに換気
- 密を避ける
- なるべく家の中を清潔にするようになりました

- シンプルな暮らし、必要なモノ以外は購入しない
- 買い物に行かなくてよいように生協に加入した
- 買い物に要する時間の短縮、スーパーの混雑時に行かない
- 水や缶詰を備蓄するようになった
- 外食を減らす、イベントには行かない
- なるべく家で過ごしている、旅行のとりやめ
- 在宅勤務

- 万一罹患して病院に行く際には、手話通訳を派遣してほしい